

【地域調査報告】

# 世界遺産登録による都市の変容

——富岡製糸場を事例として——

土屋正臣\*

中嶋俊貴・安部隼平・伊澤陸斗・小川廉・小寺翔馬・川上美優・岸遼河・  
櫻井敬太・島田享樹・竹村諒大・三澤柚太\*\*

キーワード：世界文化遺産、富岡製糸場、観光地化

## 1. はじめに

富岡製糸場が2014年に世界文化遺産として登録されると、北関東の一地方都市であった富岡市の旧市街地は、観光地化が進み、まちの環境は一変した。

これまで世界遺産登録後における地域社会変容の課題については研究が蓄積されてきた。たとえば、中国雲南省・世界遺産麗江古城を事例分析した高倉健一によれば、麗江古城が世界遺産に登録されると、観光開発が進んだ結果、経済発展を遂げたが、観光地化による生活環境の

変化によって麗江古城内に住んでいた人々が周辺地域に流出し、これまで継承されてきた生活文化の存続が危ぶまれるようになったという<sup>1</sup>。ベトナムの世界遺産ホイアン、チャンフー通りを事例分析した内海佐和子は、世界遺産登録を契機とした観光地化による店舗の経営形態変化に伴って、通り全体の景観が変化したことを明らかにした<sup>2</sup>。

これらの先行研究が示すように、世界遺産登録が結果的に当該地域の観光開発によって経済的な発展を遂げる一方、当該地域における生活文化の変容や景観の変化をもたらすことが明らかにされている。では、富岡製糸場の場合、立地する市街地の景観やそこに暮らす人々にどのような変化をもたらしたのだろうか。このことを明らかにするため、土屋政策ゼミナールでは、前期授業内で文献調査を行い、夏季休暇中の2022年9月にインタビュー調査を実施した。

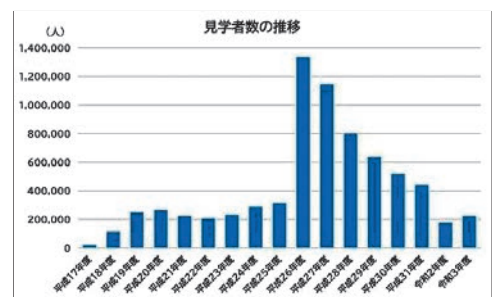


図1 富岡製糸場見学者数の推移 (富岡市観光HPより)

\* 現代政策学部社会経済システム学科准教授

\*\* 城西大学現代政策学部3年生

1 高倉健一 (2016) 「生きている文化遺産の保護・活用と住民の役割：中国雲南省・世界遺産麗江古城を事例に」『国立民族学博物館調査報告』136, 91-106.

2 内海佐和子 (2020) 「観光地化する町並みにおける店舗の経営形態別による景観の変化」『日本国際観光学会論文集』27, 95-101.

## 2. 調査の内容と結果

### 2.1 観光関連団体調査

富岡市は、富岡市景観形成ガイドラインを設定し、「にぎわいの風景」「農のある風景」「住まいの風景」と3つの類型に分けてガイドラインがある。なかでも富岡製糸場を含む「にぎわいの風景」ではまちなかに様々な風景資源があり、うまく活用していないことで魅力が発揮されていない現状があるため、有効的に活用することで風景を創造することを目指している。

富岡市観光協会へのインタビューで、同協会代表のOさんは、「富岡市は、富岡製糸場が世界遺産に認定されたときに観光地化が急激に進んでいる。そのため、富岡市や富岡製糸場の受け入れ態勢が整っていなかった。しかし現在では、富岡市の活性化のために富岡市観光協会が、市内の店舗や富岡市役所などと連携を取り、富岡製糸場の来場者を増やすために、受け入れ態勢を整えている」と答えている。

### 2.2 富岡市役所インタビュー

- ・初年度は観光客に恵まれたものの、直後のコロナ災禍や地域アクセスの問題、上信電鉄の赤字にも悩まされている。減少した観光客を増やすために市役所の方では見学しやすい形への整備を進めている。
- ・開発途中に世界遺産登録→登録後開発計画の中断と現状の維持が必須となり、開発そのものが中断になった。そのために歪んだ十字路が残されている地域も存在している。
- ・市役所では双方の合意の上で登録制度を用いており、登録された建物はその保存を保証する代わりに資金面の保証がある。
- ・富岡製糸場は近代遺産と呼ばれる、今までの世界遺産と比べて保存方法が特殊になっている。
- ・街の景観保存のために行われている登録制度は市の審査が必要になってくる。

### 2.3 地域住民インタビュー

商店を営むIさんは、「とにかくおもてなしをしなくてはならない。」ということとなった。その昔にどの人がどのような生活を営んでいたのか、など地図に載っていない情報を手書き、手作りの看板、プラカードを作ったりし始めた。ゴミとかのトラブルはいうほどない。しかし、観光客による違法駐車などの生活道路の占有があり、ストレスが溜まった。店を開けるときの挨拶をしても無視される時のストレスがすごかった。コロナ禍に直面し、人がいない状況が生まれたとき、「やっと元の街並みに戻った」と正直安堵している。

## 3. まとめ

富岡製糸場が世界遺産登録されることで、富岡市旧市街地の観光地化が進んだ。観光協会や地元自治体、地元住民は積極的に観光客を「もてなす」ことに注力し、新たなまちづくりに期待を寄せた。

旧市街地全体が観光都市としての変容を遂げる一方、それ自体が地元住民にとって新たな「ストレス」を生じさせ、道路整備は利便性確保と景観保護との間で調整を余儀なくされるなど、負の側面も生み出した。

本研究では、正負両面にわたり影響を及ぼす「世界遺産登録による観光資源化」の実態を把握した。この成果は、今後世界遺産登録を目指す都市にとって、観光資源化による都市の変容についての議論に一石を投じるものである。